

テーマ 「国語科における言語活動のあり方～思考力を育む授業づくり～」

1. テーマ設定の理由

今回の学習指導要領の改訂では、総則の中に「言語活動」の充実が明記され、各教科等にわたって「言語に関する能力の育成」が新たに加わった。国語科でこれまで行われてきた言語活動のあり方から見ると、言語に関する基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させるとともに、各教科にわたってこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育み、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かす教育の充実に努めなければならない。国語科における言語活動のあり方として、まず、文や言葉に立ち戻って論理的に考えようとする「思考力を育む授業づくり」を行うところから、先に述べたような生きる力を育む確かな学力を保障したいと考える。

本校生徒の実態では、話し合いや討論において自分の意見を言うことができる生徒は多い。しかし、その内容を見たときに教材文や表現する言葉にこだわって、論理的に発言できない生徒も多く見られる。また一方では、自分の考えをどのように構築していったらいいのかわからず、自分の意見を持ってない生徒もいる。そのような実態をふまえると、やはり、国語科としては先述したような「思考力を育む授業づくり」を考えることが必要である。

2. 昨年度までの研究について

本校の研究主題『言語活動の充実』の三年次である。

一年次は、学校研究の視点として、国語科では『言語活動の充実』の要素として「記録・要約・説明・論述・討論」を挙げた。それぞれの要素において学習者自身が自分のことばと主体的に関わり、考えることを通して「思考力」を育成することが大切だと考えた。さらに「思考力」を育成するには思考の過程をスキルとして身に付けることが有効と考えた。文章の要約や解釈などを行うときに、それを解決する手順や方法の提示である。また、思考の単調化を避けるために、それぞれの状況に応じて方法を調節し適応できるように、自分の思考を客観的に振り返る場を設定すること等を行った。

二年次は、

- ①様々な言語活動を通して学習したことを活用できる工夫された単元を構成し、学習した知識・技能を活用する。
- ②ワークシートやノートをより一層工夫して活用することを通して、様々な言語活動の中で学習者自身が自分のことばと主体的に関わり、考える。

以上の二点から「思考力を育む授業づくり」を考えた。①の中では、学校の視点である「感受・表現」「理解・伝達」「解釈・説明」「評価・論述」「討論・協同」の5つの要素を意識して、授業づくりを行った。

また、一年次、二年次ともに、学びをより深いものとするために協同学習を取り入れている。他者に説明するために自らの思考を言語化することで、自らの思考の過程を明らかにすることができる。また、他者の言語化された思考の過程を聞くことで、他者の思考の過程を知り、それを評価すると同時に、自らの思考の程を振り返り修正することができるからである。そのサイクルを繰り返すことで、思考の方法を学習すると同時に、他者の思考の方法を取り入れることができるので、より学びが深まるのである。

このように、二年間で「思考力を育む授業づくり」の土台として、「思考の過程」の学習を通して、生徒が主体的に学習していける授業形態の工夫に重点を置いて研究を進めてきたが、一定の成果がある一方で、課題もいくつか残った。

まず、単元構成の工夫についてであるが、モデルの「習得」から「活用」へと段階的に学習を進めることにより、学習者の思考が整理され、その思考の過程を振り返りながら次の活用の段階に進むことができたのは成果であった。しかし、単元当初に最終目標の提示がなされていなかったために、学びの質を保証

するための単元項目のつながりを重視し、発展的な学習につなげる点において、学習が効果的に進まなかった。最終段階にできるだけ学習者の「生きる力」に直結した課題を設定し、目標を明確に提示し、学習が進められるような単元構成を考えるべきだったのではないかという課題が残った。

ノートやワークシートの活用については、説明文の要約や自分の意見の推移をノートやワークシートに書くことで、自己の思考の過程を認識することができた。また、授業の中に協同学習を位置づけ、ノートやワークシートに書いたものを他者と交流させることで、友達の意見から自分の考えを見直したり、そこから自分の考えを修正するなど、思考が深まったり、広がることで学習者の振り返りからもみてとれた。このようなノートづくりが定着することで、学習者が主体的に学習することができていくだろう。課題としては、協同学習の場面において、学習がうまく機能する課題や進め方をどのように提示するかという点がある。例えば、班で意見を交流させ、発表するような場面において、特定の生徒の意見だけが取り上げられるようなことがあるなど、考えの修正における判断が再思考によるものではなく、成績がよい生徒の意見だからその方がよい、などの理由で自分の考えを合わせてしまうということが見られた。このようなことがないよう、課題の内容や発表の方法、また、意見を交流することでどのような力をつけるかという意識付けを教師が常に考え、生徒の学習を支援していかなければならない。

3. 本年度の研究について

そこで、本年度は、『言語活動の充実』の最終年次として、昨年までの課題の改善を含み、以下の視点から「思考力を育む授業づくり」を目指す。

①生徒一人ひとりが「方法」を身につけ、その「方法」を活用できるような単元を構成する。
②ノートやワークシートに文字言語化し、自らの思考の過程と他者の思考の過程を客観的にとらえ、認知することで、多様な思考力をつける。
③②の学習に深まりを持たせるために、協同学習を取り入れる。

①②において、本年度の学校研究の視点である「説明する活動」に重点を置き、研究を進める。

(1) 国語科で考える「説明する活動」のとらえ方

国語科では本校の本年次の研究の視点である「説明する活動」を、自らの思考の過程を認知し、思考力を育む授業づくりのための「方法」として位置づけている。特に②においては、「説明する活動」を通して行われる内容である。そのサイクルを繰り返すことで、思考の「方法」を習得すると同時に、他者の思考の「方法」を取り入れ、多様な思考が育成されると考える。

(2) 説明する活動の手順

国語科においては、学習する内容によって自分の考えを説明するための視点が変わる。よって、学習する内容における視点を、以下の手順にあてはめて行う。また、説明する内容により、3と4まで進まないこともある。

1	自分が考えたこと（主題・登場人物の心情・解釈・構成の工夫点など）を根拠・理由を明らかにしてノートやワークシートに書く。
2	グループ／ペアで書いたものを読んだり、見せたりして説明する。
3	説明を受けたことについて、その説明内容が妥当かどうか（根拠や理由において）判断し、質疑応答する。
4	他者の意見や他者の説明を参考にしながら、自分の書いたものを見直してもう一度検討し、修正を加える。

(3) 説明する活動の実践例

学 習 内 容	活 動 の 具 体 例
詩・短歌・俳句	与えられた対比・類比・表記・技法等の鑑賞の視点を使って書かれた鑑賞文を、班で相互に説明し、取り上げた鑑賞の視点について妥当性を検討、修正を加えた。
説明的な文章	文章構成・叙述・具体例の内容など、わかりやすい説明のための視点をもとに、その文章における説明の工夫点を分析する。分析結果を根拠に文章を評価したものを、班で説明し合い、検討、修正を加えた。
文学的な文章	登場人物の心情について、情景描写に視点をあて、そこから読み取った心情を、班で説明し、他者の読みを参考にもう一度本文に立ち返り、どのような心情が読み取れるか考えた。
古典（徒然草）	本文から教訓を読み取り、なぜそのような解釈に至ったかを、本文に書かれていることを根拠として理由を書き表す。それを班で説明し、その解釈の妥当性について検討し、修正を加えた。

4. 成果と課題

① 「方法」を活用できる単元構成

「方法」の学習が生徒の学習意欲を高め、自分の力での学習につながることは、昨年までの研究においても成果として出ていた。本年度の研究では、学習した「方法」を単元の中で意識的に活用することで、それがより定着できるよう意識した単元の構成をした。実践にもみられるように、説明文教材からはレポートを書く「方法」の学習を、漫画資料からは心情を表す表現を読解するための「方法」を学習した。教材から学習の「方法」のモデルとなるものを提示し、その後、それを活用して書いたり、読解をするのである。前時までに学習したモデルがあるために、活用する段階における生徒の学習の様子は、発展的な課題ではあったが、モデルを振り返りながら課題を解決していくことができた。例えば、実践1のレポートを書く学習では、書く時にいままでの学習の過程をノートや説明文を振り返りながら書く生徒や、説明文教材で筆者の工夫として学習した表現を自分のレポートにも取り入れる生徒が多く見られた。今までもレポートを書くとき、書き方だけが載ったプリントなどは配布され、それを見ながら書いていたが、実際に自分が筆者の工夫を読んで学習したので、より具体的に「方法」として蓄積されたのではないだろうか。単元の中で「方法」のモデルを学習し、それを活用する単元の構成には、生徒の学習に深まりを持たせる成果が見られた。

② 思考力をつけるノートやワークシートの工夫

昨年までの研究から引き続き、ただ単に記録のためのノートではなく、目に見えない思考の過程を認識する、学び合う学習ツールとしてのノートやワークシートの使い方を考えてきた。

ノートやワークシートに文字言語化することで、自らの思考の過程や他者の思考を目で確認し、それをもとに学習を深めることができる。また、確認した思考の過程をモデルに他の文章でもその思考を使うことができる。それが、自分の力で学習することにつながっていき、また、多様な思考力を育むと考える。

今回の実践でも、説明文教材において文章構成を考える際、マッピングを使って、構成を図示した。文章だけで見ると、ただ文が続いていくだけにも見えるが、言葉をピックアップしながら図示していくと、組み立てがよく見える。文章だけをみて、ここでなぜ分かれるのか、ということを検討していたときよりも、生徒たちもひと目見て理解していたようである。また、なぜそこで分かれるかということを検討しているときも、他者のものと自分のものをならべて比較することで、自分の見えていなかった構成を確認し、検討、修正できていた。

このように、自分の思考や他者の思考が可視化できるノートやワークシートを工夫して、生徒がそれをツールとして利用していくことが、限りある思考力ではない、多様な思考力につながるのではないだろう

か。

③ 協同学習

協同学習については、多様な思考力を養ううえで欠かすことはできない。②にも書いたように、思考の過程を認知することは必要であるが、自らの思考の過程だけでは多様な思考力を養うことはできない。そこには、必ず他者からの働きかけが必要である。

本年度の実践の中でも、協同学習を取り入れることで、批判や修正からことばの学びに磨きをかけることができた。しかし、課題も残った。教材に対する理解ができていない状態で班活動を取り入れることで、学びの停滞がおこってしまう場面があった。協同学習においては、班活動だけではなく、教師が中心となって生徒の発言をつなぐ中での協同学習も考えられる。生徒の理解や状況にあった形態を選択する必要性がある。このことを来年度からの改善点として反省しなければならない。

また、本年度の国語科の研究全体を通して考えられる課題は、①から③について、3年間の系統性を持たせるということである。単元の構成を工夫したり、思考の過程を認知できる授業の工夫をすることで思考力を養っていく。しかし、その内容が重複してしまったり、本校の生徒にどの段階で、どのような力をつけさせるのかがはっきりしないと、学びの深まりは得られない。やはり、本校の国語科としてどのような力をどのような段階でつけていくか、ということを確認にして指導していくことを課題として、研究を進めていく必要がある。

〈参考文献〉

- ・中学校学習指導要領（平成20年度3月告示）及び解説
- ・新しい教育課程における言語活動の充実 財団法人 学校教育研究所 学校図書 2010年
- ・思考力育成への方略－メタ認知・自己学習・言語論理 井上尚美 明治図書 2007年
- ・中学校新教育課程国語科の指導計画作成と授業づくり 高木展郎・三浦秀一 明治図書 2010年
- ・第49集いとなみ 和歌山大学教育学部附属中学校 2010年

1. 単元名 事実をわかりやすく伝える ～表現の工夫を考える～

2. 単元観

生徒はこれまでに、体験したことを新聞にまとめたり、スピーチ原稿を書く学習をしてきた。本単元では、総合的な学習と関連させ、「和歌山調べ」において興味のあることを課題に設定して調べ、その活動のレポートを書く。自分たちの住んでいる街について、自分で課題を設定して調べるため、生徒にとっても興味を持って取り組むことができる。前期の後半から、総合的な学習の時間で個人テーマを絞り、インターネットや書籍、また、現地調査でインタビューを行うなど調査を進めてきた。そこで調べたことを友達に伝えることは、自分たちの活動の成果を発表できるということもあり、レポートを書く意欲も高まる。

調べたことをわかりやすく伝えるレポートを書くには、だれに、何を、どのように伝えるのかを意識して書かせる必要がある。そのためにも、文章構成や表現、資料の取捨選択、図表やグラフなどを取り入れた、わかりやすいレポートの書き方を学ばせたい。

そこで、本単元では、実際にレポートを書く前に、説明的な文章である「未来をひらく微生物」を読むことを通して、わかりやすい文章を書くために必要なことについて学習する。

「未来をひらく微生物」は普段その存在を気にすることのない「微生物」について、その働きと、それがもたらす環境改善への大きな可能性を述べ、生命への新しい視点を開かせる内容である。文章構成は18段落からできており、大きく3つのまとまりに分けられ、構成がはっきりしている。叙述の特徴としては、段落のはじめに接続語や指示語を用いることで、それぞれの段落の関係と役割がわかりやすい。また、微生物による環境回復の仕組みを、人間の健康回復の仕組みに例え、内容を具体的にわかりやすくする工夫も見られる。ほかにも、内容を図で示すなど、これらの工夫を読解を通して学習し、自分の設定した課題のレポートに活用できるよう指導したい。

また、本単元では「未来をひらく微生物」に見られるわかりやすい文章の工夫点の分析や、生徒が書いたレポートの書き方についての意見交流の場面で、自分の考えや書いたものについて他者と交流する活動を設定している。自分の発見した工夫点や自分の書いたものの工夫点について、根拠をもとに説明することで自分の思考を確認することができる。また、他者からの指摘や他者の工夫を自らに取り込むことで、わかりやすい文章がどのようなものかについて、より多角的な学習が可能になると考える。

3. 単元の指導目標

段落や構成に着目して文章を読み、学んだことを生かして事実を正確に伝える分かりやすいレポートを書かせる。

4. 単元の評価規準

<p>ア 国語への関心・意欲・態度</p>	<p>1 段落の関係や表現の工夫をとらえながら、説明文を読もうとする。 2 自分の興味のある課題を見つけ、調べた事実をわかりやすく報告しようとする。</p>
<p>イ 読む能力</p>	<p>1 専門的な語句などを、文脈に即して的確に意味をとらえ、キーワードを考えている。 2 事実と意見などを読み分け、文章の構成を整理して、文章の要旨をとらえる。 3 説明的な文章の構成や表現、図表の役割をとらえ、その効果について自分の考えを持っている。</p>

ウ 書く能力	1 自分の課題に必要な情報を集め、その中から適切な材料を取捨選択して、まとめている。 2 調べたことを整理して表現するために、段落を組み立てて、文章を構成している。 3 書いたレポートを互いに読み合い、説明のわかりやすさや表現の効果について意見を述べたり、自分の表現の参考にしている。
エ 言語についての知識・理解・技能	1 文章を読んで意味のわからない語句を辞書で調べて、文脈上の意味を考えている。 2 説明の文章を読む上で大切な指示語や接続詞に注意している。 3 レポートを書くときに、指示語や接続詞を工夫して使っている。

5. 単元計画 10時間 (◎は本時で5時間目)

学習内容	ねらい	中心となる言語活動	評価規準
◎「未来をひらく微生物」の書き方について、工夫点を考え、学習する。(5時間)	・本文をわかりやすくしている工夫(構成・時系列・分類・例え・図表)について考え、理解する。	・それぞれの文章のわかりやすい点、わかりにくい点を分析し、説明する。 【解釈・説明】	アー1 イー1 イー2 イー3 エー1 エー2
集めた情報を自分の課題に沿って取捨選択し、レポートを書く。(4時間)	・レポートの構成に従い、調べたことを事実と意見に分けて、わかりやすくまとめることができる。	・調べた課題について、必要な情報を吟味しまとめる。 【感受・表現】	アー2 ウー1 ウー2 エー3
完成したレポートを読み合い、書き方について意見を交流する。(1時間)	・レポートの構成や文章表現を理解し、評価できる。	・レポートの工夫点について分析し、評価する。 【評価・論述】	ウー3 エー2

(道徳的視点) 2 - (5) 寛容の心

- ・意見を出し合い、レポートを読み合うことで、いろいろなものの見方や考え方があることを理解させたい。

6. 本時の目標

構成や図表、表現に着目し、わかりやすい文章に必要なことを考え、理解する。

7. 本時の展開

	学 習 活 動	教 師 の 指 導	備 考
導 入	・前時を振り返る。 ・本時の目標を確認する。	・前時までのまとめと本時の目標を確認させる。	
展 開	・「未来をひらく微生物」におけるわかりやすい書き方の工夫点とわかりにくい点について書き出したものをもとに各班で発表し、その内容について検討する。	・役割分担をしながら発表し、書き方の工夫点について、その人の分析が妥当かどうか、考えながら聞くよう指導する。	ワークシート

	<ul style="list-style-type: none"> ・班ごとにわかりやすい文章の書き方に必要なことをまとめる。 ・班ごとに必要な点を全体で整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・班で出た具体的工夫点から、わかりやすい文章を書くために必要なこととして一般化させる。 ・班で一般化したものを整理できるよう解説する。 	
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のまとめをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りシートを書く。 	振り返りシート

8. 結果と考察

今回の実践では、説明文を読むことからレポートにおける表現の工夫を学習し、その表現の工夫をいかしてレポートを作成するという単元を構成した。説明文教材の表現の工夫をモデルとし、そのモデルがレポート作成にうまくつながるよう、次のような工夫を行った。

説明文を読む学習において工夫した点は、構成やわかりやすく伝えるための表現の工夫が生徒自身の読みによって発見できるよう「マッピング」の使用とカードでの分類を行ったことである。生徒達は説明文教材「ちょっと立ち止まって」「クジラたちの声」における学習や今までの学習経験の中で三段論法やたとえ・比喩・対比・ナンバリングなどについては、既に知っている。

そこで、「クジラたちの声」を使い、マッピングのモデルを提示した。そのモデルをもとに、説明文教材「未来をひらく微生物」のマッピングを個別に作成した。作成の様子を見てみると、構成上の分岐点について戸惑う部分も見られたが、本文の言葉に立ち返りながら、じっくりと文章に向き合う姿が見られた。また、数人のマッピングを比較、検討することで、構成や言葉の働きについても吟味することができた。

カードでの分類については、マッピングで文章全体を読んだあと、筆者の工夫が見られる点と工夫が必要だと思われる点の2点に行った。色別のカードに抜き出し、その工夫による効果等についてカードに書き出した。それぞれ書き出した手持ちのカードを班で発表したあと分類し、分類に名前をつけたものを全体で発表する。書き方の工夫については、ラベリング・ナンバリング・たとえ・比喩など、「未来をひらく微生物」に見られる表現の工夫を中心に、あとで書くレポートに必要なものをプリントにまとめたものを配布した。しかし、ただプリントを配布するだけではなく、生徒自身が実際に筆者が書いた説明文の中から生きた表現を見つけたものを、指導者が整理するという流れを経たため、生徒にとっては表現の工夫がどのようなものかというものを実感できたのではないだろうか。

実際にレポートを書く学習において、構成を考える上でマッピングを利用したり、表現においてもナンバリング・ラベリングなど、学習したものを使って書かれたものが見られた。また、レポートを書きながら「未来をひらく微生物」の文章に立ち返りながら、説明と考察とのつながりをもう一度考え、自らの文章に生かそうとする姿も見られた。

このように、生徒の既有知識を生かしながら、自らの読みの中で発見し獲得した表現を、すぐに自らの表現として使用できる場面をつくる。そのような単元構成を組むことで、生徒は学習したことをより実感しな



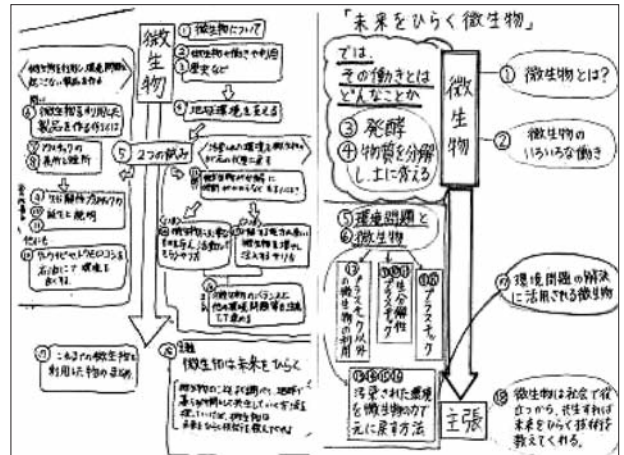
が知識として、そしてスキルとして、蓄積していくことができるのではないだろうか。

しかし、今回の実践では課題もあった。「未来をひらく微生物」の読む学習において、表現の工夫に意識的に着目させたことで、この文章が持つ内容の魅力をうまく生かすことができなかつた。「微生物が未来をひらく」という、普段あまり気にもとめない微生物が自分たちの未来に関わっているという発見や驚きといった、説明文の持つおもしろさを十分には伝えることができなかつた。次にレポートを書くという目的を教師の側が意識をしすぎたためにそうってしまった。その作品の持つ魅力を感じながら、読むための、書くためのスキルとして学習できるという、バランスの良い授業を構成していかなければならないだろう。

■筆者の工夫を書いたカード

<p>《筆者の工夫(仮定)》</p> <p>例示(身近なもの)</p> <p>① イー・ベスト(衣類)</p> <p>② 微生物分解(分解)</p> <p>③ 微生物分解(分解)</p> <p>④ 微生物分解(分解)</p> <p>⑤ 微生物分解(分解)</p>	<p>《筆者の工夫(仮定)》</p> <p>たとえ</p> <p>① 微生物分解(分解)</p> <p>② 微生物分解(分解)</p> <p>③ 微生物分解(分解)</p> <p>④ 微生物分解(分解)</p> <p>⑤ 微生物分解(分解)</p>	<p>《筆者の工夫(仮定)》</p> <p>仮定</p> <p>① 微生物分解(分解)</p> <p>② 微生物分解(分解)</p> <p>③ 微生物分解(分解)</p> <p>④ 微生物分解(分解)</p> <p>⑤ 微生物分解(分解)</p>
---	--	---

■「未来をひらく微生物」マッピング



■生徒の書いたレポート

世界中活躍する島精機製作所 1

1 課題設定の理由

私はおもしろい機械製作所を知ることができ、手が触れたいと思った。また、世界中で活躍している機械製造工場を知りたいと思った。また、世界中で活躍するために必要な技術を学ぶことも、自分の将来に役立つかもしれないと思った。また、世界中で活躍するために必要な技術を学ぶことも、自分の将来に役立つかもしれないと思った。

2 調査の方法

- インターネット
- 現地調査 (7月17日の機械見学会)
- 島精機のホームページ (FAX)

3 島精機全国 世界への出発点!! (調査内容)

① 島精機について

島精機は、繊維用機械を製造する企業である。島精機は、繊維用機械の自動化という課題をもち、島精機が1962年に和歌山県和歌山市千原に株式会社島精機製作所を設立した。1968年には現在の和歌山県和歌山市千原に工場を設立した。

② 手袋編織機

手袋編織機は、手袋の製造に用いられる機械である。手袋編織機は、手袋の製造に用いられる機械である。手袋編織機は、手袋の製造に用いられる機械である。

世界中活躍する島精機製作所 2

③ 世界中の活躍

島精機の機械は、世界中に広がっている。島精機の機械は、世界中に広がっている。島精機の機械は、世界中に広がっている。

④ 宇宙にも島精機!!

島精機の機械は、宇宙にも活用されている。島精機の機械は、宇宙にも活用されている。島精機の機械は、宇宙にも活用されている。

⑤ 世界のつながり

島精機の機械は、世界中のつながりを強めている。島精機の機械は、世界中のつながりを強めている。島精機の機械は、世界中のつながりを強めている。

⑥ 未来

島精機の機械は、未来を開拓している。島精機の機械は、未来を開拓している。島精機の機械は、未来を開拓している。

1. 単元名 非言語コミュニケーションから言語コミュニケーションへ

2. 単元観

現在の二年生は、感情或いは思考としても非常に多様な生徒集団である。ところが、彼らの多くはその多様な感情や思考をごくごく簡単な言葉でしか表そうとしない。そのために互いの理解に誤解が生じることが少なくない。また、対面した状態でのコミュニケーションでは伝わっていた雰囲気のようなものを、メールで安易な言葉だけで伝わると思い込んでいるために、メールを媒介とするコミュニケーションでは結果として誤解を招くことが多い。

このような現状を打破するために、生徒自身が簡単な言葉や場面に依存した表現の実態を知り、伝達の不十分さを自覚するとともに、いまだ言語化されていない豊かな内容を言語でとらえなおす必要がある。そのことを踏まえて、生徒自身が本来持っている非言語コミュニケーション能力を自分の中でくすぶらせずに外へと拡張させたい。そのために、生徒自身が強い興味を持ち、感想や意見を出しやすいものを教材として選びたいと考えた。それは、映画や漫画などの持つ映像的な部分や表情・感情などである。映画やマンガを見終わった後の感想の話し合いや同じ場面でもとらえ方が変わることなど理解し合う…つまり、非言語的な表現媒体を言語表現媒体に転換させることで、生徒自身の中で言語能力の存在を再認識できると考えた。加えて、それら映画やマンガなどのような非言語的表現媒体を言語媒体として表現している文学教材－いわゆるノベライズや原作ものなど－を通して、非言語表現を言語化している過程を想像させたい。そうすることで、他者がいかに深い思考をしているかということへの理解を深めると共に自分自身の深い思考にも気づかせ、最後にはその自分自身の思考を他者へ伝えることの難しさやその重要さにも気づかせたい。

3. 単元の指導目標

日常の会話での非言語コミュニケーションの重要性に気づかせ、言語化で失われやすい文脈を理解して言語で補えるようにする。

4. 単元の評価規準

ア 国語への関心・意欲・態度	1 風景描写による感情表現や抽象的な概念など、形がないモノを言葉に置き換えて相手に理解してもらえるようになることに興味を持つようにする。
イ 書く能力	1 与えられた非言語コミュニケーションを用いた表現媒体【絵画、台詞のない映画や漫画の一シーンなど】そのものやそこから自分自身が感じ取った意見や心情が、相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫しようとする。
ウ 読む能力	1 非言語的なモノを言葉で伝えようと工夫するときに、教科書だけでなく様々な言語表現媒体【文学作品】の中から、抽象的な概念を表す語句や心情を表す語句などを取捨選択しようとする。
エ 言語についての知識・理解・技能	1 抽象的な概念を表す語句や多義的な意味を表す語句などについて理解し、語感を磨き語彙を豊かにしようとする。

5. 単元計画 6時間 (◎は本時で2時間目)

学習内容	ねらい	中心となる言語活動	評価規準
◎言語だけでなくコミュニケーションの世界 (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションにおいて、言語だけが重要なモノではないことに気づき、興味を持つようになる。 ・絵画や立体造形物、映画や漫画の一シーンを自分自身で理解したことを言語で伝達できるようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な非言語的な表現媒体を相手に言語として伝える工夫をする。 【理解・伝達】 ・過去に学んだ、或いは経験した表現から非言語コミュニケーションの重要性を理解する。 【感受・表現】 	<p>アー 1 イー 1 エー 1</p>
言語による表現媒体の中にある非言語的な表現の世界を理解する (3時間)	<ul style="list-style-type: none"> ・小説や俳句などの文学教材で使われる風景描写や行動描写による感情表現から、どのように自分が感情を読み取ったのかということを他者に理解してもらうという点で言葉を選び伝達しようとする。 また、自分自身がそう感じたという過程を自分自身で理解し、その妥当性や根拠を解釈して他者に説明できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他者に理解をしてもらうためには、共通したイメージを伝えられる言語が必要なことに気づき、その言葉を取捨選択し表現し合う。 【理解・伝達】 ・非言語的な表現から、どのような過程で感想や意見を持つに至ったのかを自分自身の過程を追究できる。 【解釈・説明】 ・非言語情報を言語化した過程の根拠や妥当性を自ら解釈して他者に説明。 	<p>アー 1 イー 1 ウー 1</p>

(道徳的視点) 内容項目 2 - 5

単元全体を通して、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、謙虚に他を学ぶ広い心を持つ。

6. 本時の目標

多様なそれぞれの気持ちを伝えるためには簡単な言葉や表現では出来ないことに気づかせた上に、さらに、工夫した言葉が相手に伝わる過程を想定する。

7. 本時の展開

	学 習 活 動	教 師 の 指 導	備 考
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の復習を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・気持ちやモノを伝えることの難しさを思い出させる。 	
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ・台詞のないシーンを含む漫画の一部をノベライズする。 ・班内で発表し合って、表現を改良していく。 【相違点を話し合う。】 	<ul style="list-style-type: none"> ・感情表現の伝達工夫に重点を置かせる。 ・自分が感じ取ったことがどのようなモノか、それを他者に伝えるためにどんな言葉や表現が必要かを考えさせる。 【読み取った心の声を、表情や擬音語などの表現のどれから感じたかに気づかせて、言語化させる。】 	
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ・班内での発表から、感情が伝わった表現を出し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・その表現が、なぜ感情を伝えられたのかについて話し合う。 	

8. 結果と考察

今回の授業の大きな目的は、生徒に自分たちが言語的な表現媒体を無意識に理解しているのだと言うことを認識させることと、その理解した内容を他者へと伝達などをするための工夫をさせて苦手感を無くそうというものだった。

第一に、無意識に理解している部分を「自分たちは分かっているんだ」と理解させて、自信を持たせたいと考えた。生徒の多くは、「この理解で正しいのか?」「この感想でいいのか?」「人と違って良いのか」と悩みがちであることが多いと判断したからだ。そこで、生徒の身近にあるものであり、読み方や感想に正解がないと生徒が考え、違っても良いと生徒が常に考えているものを題材として扱うことにした。マンガである。ライトノベルでもかまわないかもしれないが、現在の本校生徒の読書現状を考えると、活字に対する娯楽感や親近感が薄い生徒が多い。そうするとライトノベルとはいえ、教科書や一般的な小説などの文学教材を読ませると何ら変わりはないと判断した。こちらがポイントとしたのは、『生徒が感情や情緒的なモノを楽しんでいる作品』と『生徒自身が学校としては価値が無く、自分たちとしては価値があるモノと考えている作品』を教材とすることだったのだから…。つまり、生徒は『マンガ』をただ漠然と読んでいたのではなく、しっかりと無意識に理解しているのだと予想していたのだ。

この考えが根底にあって、今回の授業を展開していったのだが……そこに大きな落とし穴があった。

授業を始めると、彼らは案の定いつも以上に興味を示した。教材に選んだマンガは彼らの知らないマンガを選んだが、すごい集中力を示して読んだ。読み取ったことを意見交換させると「おもしろかった」「おもしろくなかった」等の感想が大半を占めた。そこは想定内だったので、『どこが—どのコマやどの表情—



が印象に残ったのか』や『そのコマや表現から、どのようなものを感じたのか』を問いかけた。ここから、生徒自身の意見が多様に出ると考えていたが……非常に動きが悪かった。と言うか、どこからか何かを感じているはずなのに、それを自分自身で探そうとしたことがなかったと言うべきだろう。

何かを感じているのは間違いない。意見交換になると、「それは違う」「うーん」といった表情や言葉が多かったからだ。だが、自分の心の中にある違和感の発信源を探し慣れていないのだ。そのことに気がついたのは、研究会の前日だった。このまま、現状の指導案でいくべきか悩んだが、一部を改定して授業に入ることにした。『背景が空白のシーン』『擬音語』『汗や怒りなどの記号』『連続したコマによる表情の

変化』などがどのような意味や効果をもたらせているのかを、実物投影機で大型テレビに映して説明しながら考えさせた。この説明の甲斐があって、なんとかマンガをノベライズさせるのも形になった。

結果として、こちらの想定とは違った生徒の反応に対して指導案を変更するのに手間取ってしまい、非言語表現を言語的な表現に変換する時の自分の思考変化を生徒自身に何故そうなるのかと十分に考えさせることが出来なかったのが残念である。



だが、『自分の感想や思考やその原因を探し慣れていない』理由が少し見えてきた。

一つは、自分の感想や考えが他人と違うことは、とても悪いことだと思っていることである。或いは、他人に否定されることになれていないと言っても良いかもしれない。

一つは、自分の感想や考えを感じたポイント【ある言葉や絵など】をうまく拾えないことである。

一つは、その感想や考えを他者にも理解してもらおうボキャブラリーやどういえば理解してもらえるのかと考える経験の少なさである。

一つ目は、今までの協同学習の成果がでているので継続すれば克服していける。二つ目と三つ目は、今まで以上に「自分自身の意見や考え」を「どの部分について」「どう考えたり、感じたりしたのか」を「しっかり自分なりの理由をつけて説明する」ようにすれば、向上していけよう。ただし、より明確な目的意識を持ってさせなければ、何か楽しい授業をして終わってしまう可能性は大きい。

また、多様性を感じさせたくて、生徒それぞれが違う場面を担当とさせたが、同じ場面である方がより比較して意見交換を活発に出来ただろう。

教材としての問題は、あまりに長い作品は授業で取り上げるには適していないということと生徒にとって共感できるものを選ばなければならない。

当たり前のことが結論になったが、以前から考えていた映画やマンガなどの非言語表現からも言語表現を引き出す授業の可能性が十分に感じられたことはよかった。勿論、まだまだ工夫しなければならないところは多い…映画やマンガを楽しむだけではいけない。これらを通して、文学教材へと興味を示させなければ意味がないからだ。

なによりも、私自身がいつも意識している『何よりも生徒が楽しそうに興味を持って言語表現について考えられる授業』の新しいことを試せたのは、初心に戻ると共に新しい工夫を続けることのつらさと面白さを思い出せて、本当に大きな収穫であった。今後も、自分自身の思いと深い理論に裏付けされた思考と生徒への思いを両立させた研究を重ねていきたい。



